

令和4年度 **国** **語** (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は26ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

国語

解答番号

1

22

1

次の問1～問5に答えよ。

問1

(ア)、(イ)の傍線部の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

1

2

(ア) アナウンサーの明瞭な発音を聞く。

1

- ① けいかい
- ② けいみよう
- ③ めいかい
- ④ めいりよう
- ⑤ めいろう

(イ) 期待と不安が交錯する。

2

- ① かいそう
- ② こうしゃく
- ③ かいしゃく
- ④ ふさく
- ⑤ こうさく

問2 傍線部に当たる漢字と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

メイギを娘に書き換える。

- ① テキギ^レ休みをとる。
- ② 自分のギム^レを果たす。
- ③ ギジュツ^レの向上を図る。
- ④ ヨウギ^レを否認する。
- ⑤ ギカイ^レの承認を得る。

問3 空欄 に入る言葉として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

決勝戦に進出できて

夢のようだ。

- ① たとえ
- ② どうか
- ③ もしも
- ④ ぜひ
- ⑤ まるで

問 4 熟語の構成として他と種類が異なるものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

5

① 就職

② 入学

③ 潜水

④ 巨大

⑤ 即位

問 5 手紙を書く時期(新暦)と時候の挨拶の組合せとして適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

① 二月中旬……立春とは言いながら寒い日が続きます

② 四月上旬……小春日和の好天が続く今日この頃

③ 七月下旬……暑中お見舞い申し上げます

④ 八月中旬……残暑お見舞い申し上げます

⑤ 十月上旬……秋晴れの日が続く今日この頃

2

東高校では、「新入生オリエンテーション」の一環として、入学式の翌日の放課後に、生徒会が主催する「部活動紹介」が体育館で行われる。次に挙げる【部活動紹介冊子(演劇部)】は、新入生に配られた部活動紹介冊子中の演劇部のページである。また、【演劇部勧誘スピーチ】は、体育館での部活動紹介の際に、演劇部の飯山さんが新入生に向けて話したものである。これらを読んで、問1、問2に答えよ。

【部活動紹介冊子(演劇部)】

部活動名 (演劇部)
 活動日 (月・火・金(週3日))
 活動場所 (第1体育館ステージ)

新入生の皆さんへ

4月20日 16:00～
 第1体育館ステージ
 A 新歓公演やります！



- 2年生6名、3年生4名の10名で活動しています。
 B とても仲のよい部活です。
 C 誰もが「主役」になれる部活です。
 D 初心者、経験者は問いません。
 E 意欲があれば誰でもOK!

まずは第1体育館ステージに遊びに来てください。

— 10 —

【演劇部勧誘スピーチ】

皆さん、こんにちは。演劇部の紹介を始めます。私は部長の飯山です。冊子の10ページをあけてください。活動日や活動場所などは、冊子の通りです。今日は、各部ごとの紹介時間が5分ということなので、皆さんに特に伝えたいことを、二つに絞ってお話しします。

私が伝えたいことの一つ目は、演劇部は、誰もが自分のやってみたくて実現できる部活だということです。皆さんの中に、文章を書くことが好きな人、絵を描くことが好きな人、大声を出してスッキリしたい人、小物を作ることが好きな人、舞台照明や音響の装置に興味がある人、舞台の演出をやってみたくて人などはいませんか？ 皆さんそれぞれが「やってみたくて思っていること」を実現できるのが、演劇部です。その意味で、演劇部では誰もが主役です。ぜひ一度、演劇部の活動を見に来てください。

伝えたいことの二つ目には、10ページのシマウマのイラストが関係しています。「演劇部がなぜシマウマ？」と思っている人がいるかもしれませんね。冊子にも書きましたが、4月20日の16時から第1体育館ステージで、新入生歓迎公演を行います。「シマウマのユウウツ」という創作劇を上演します。「シマウマのユウウツ」というタイトルは忘れてしまったとしても、このシマウマのイラストを見て、シマウマにちなんだ新歓公演があることを思い出してください。ついでに言うと、演劇部の顧問は理科の島田先生です。シマウマの「シマ」という音で、顧問は「シマ」という音から始まる島田先生だということも、思い出してください。

以上で演劇部の紹介を終わります。

問1 飯山さんは【演劇部勧誘スピーチ】をする際、【部活動紹介冊子(演劇部)】の記載事項のどの部分に焦点をあてて話しているか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 下線部Aと下線部C
- ② 下線部Aと下線部D
- ③ 下線部Bと下線部D
- ④ 下線部Bと下線部E
- ⑤ 下線部Cと下線部E

問2 飯山さんの【演劇部勧誘スピーチ】について正しく説明したものはどれか。その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ア スピーチの中で同じ呼びかけの表現を繰り返すことで、聞き手との一体感をつくりだそうとしている。
- イ 聞き手が疑問に思うような事柄を挙げてから具体的な説明をすることで、聞き手の興味を引きつけるようにしている。
- ウ 【部活動紹介冊子(演劇部)】に書いていない内容をスピーチの中心に据えることで、聞き手に演劇部の詳細な情報が伝わるようにしている。
- エ 「二つ目」「二つ目」のような文脈を整理する語句を使うことで、聞き手が正確に聞き取ることができるようにしている。
- オ 難しい外来語にはその都度丁寧な説明を加えることで、聞き手が内容を理解しやすくなるようにしている。
- カ キーワードを繰り返すことで、伝えたいことを聞き手に印象づけようとしている。

- ① アとオ
- ② アとウとエ
- ③ イとエとカ
- ④ イとオ
- ⑤ ウとカ

3

南高校では、国語の時間に「現代の若者」について各自がテーマを設定し、それについて調べた結果を報告書にまとめる学習をしている。今回の授業の目標は、自分の研究の全体像を分かりやすく伝える中間報告書を作成することである。そのために、各自が作成した中間報告書をグループ内で読んで、内容や表現についてのアドバイスをし合った。上田さんが書いた【中間報告書案】と、【グループの人が付箋紙に書いた上田さんへのアドバイス】を読んで、問1、問2に答えよ。

【中間報告書案】

中間報告書案

上田 光

【テーマ】

インターネットを利用する10代の若者はどのような問題を抱えているのか。

【テーマ設定の理由】

現代の高校生はスマートフォンを手放すことができない生活を送っており、このことが、10代の若者の日常生活全般に悪影響を与えているのではないかと考えたため。今回の研究を通して、インターネットを利用する10代の若者が抱える問題について明らかにしたい。

【進捗状況】

10代の若者のインターネットの利用状況を調べるために、総務省情報通信政策研究所「令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」(以降「報告書」と表記)の特徴的なデータに注目して分析した。得た結論は次の2点である。

1. 10代の多くの人々がスマートフォンを手放せない生活をしており、利用するメディアがインターネットに大きく偏っている。
2. インターネットの利用項目の中では、ソーシャルメディア、動画、オンラインゲーム・ソーシャルゲームなど、利用時間が長くなる傾向のあるものが、10代には人気がある。このことが10代のインターネットの利用時間を増やす要因となっている。

「1」については、「報告書」によると、テレビ、インターネット、新聞、ラジオというメディアのうち、10代の若者が利用するメディアとして群を抜いて多いのがインターネットである。実に9割以上の若者が平日・休日にインターネットを利用している。また、若者のインターネットの平均利用時間は、若者の他のメディアの平均利用時間より長く、平日では約4時間、休日では実に5時間以上に上る。このことから、10代のかなりの人がスマートフォンを手放せない生活をしていることが分かる。

「2」については、「報告書」で10代の若者がインターネットを何に利用しているのかを調べてみると、平日・休日ともに上位の3つにあったのが、「ソーシャルメディアを見る・書く」「動画投稿・共有サービスを見る」「オンラインゲーム・ソーシャルゲームをする」であった。さらに「報告書」のデータによると、若者がそれらを行う時間の平均は、「ソーシャルメディアを見る・書く」「動画投稿・共有サービスを見る」ことについては、平日・休日ともに約1～2時間、「オンラインゲーム・ソーシャルゲームをする」ことについては、平日・休日ともに1時間程度になっている。これらのことから、比較的利用時間の長いソーシャルメディア、動画、オンラインゲーム・ソーシャルゲームなどが10代には人気があり、そのことが10代のインターネットの利用時間を増やす要因となっていることが分かる。

【今後の予定】

今回【進捗状況】に書いた内容を、図表を交えて分かりやすくまとめるつもりである。

【参考資料】

総務省情報通信政策研究所「令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」

https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf

総務省情報通信政策研究所「令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」により作成

中間報告書案の【テーマ】と【テーマ設定の理由】を見ると、上田さんは、「スマートフォンを手放すことができずにインターネットを利用し続ける現代の高校生たちは、そのことに悪影響をうけている」と捉えています。しかし、スマートフォンにはよい点もたくさんあると思うので、【今後の予定】には、この点を調べていくことを書くといいと思います。

(奥川)

上田さんは【進捗状況】のところですぐに結論を述べてしまっていますが、これではせっきくの面白味が半減してしまうと思います。だから、中間報告書をまとめなおすときには、読み手が読み進めながらいろいろと想像を広げることができるように、最後まで全体像が分からないような書き方をした方がいいと思います。

(立石)

中間報告書案では、総務省情報通信政策研究所「令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」が使われています。上田さんは【進捗状況】のところ、この資料の表記について「以降『報告書』と表記」としていますが、用いた資料は正確に表記すべきだと思うので、このような省略はしない方がいいと思います。

(横峰)

上田さんは「10代の若者はどのような問題を抱えているのか」を【テーマ】にしていますが、10代の中でも一部にはインターネットを利用しない人もいます。だから、インターネットを利用しない10代の人たちがどのような問題を抱えているのかについても詳しく調査すると、内容が充実すると思います。中間報告書には、そのような内容も加えてはどうでしょうか。

(下山)

上田さんの【テーマ】は「インターネットを利用する10代の若者はどのような問題を抱えているのか」ですが、この中間報告書案の【進捗状況】を見ると、「10代の若者のインターネットの利用状況の分析」にとどまっています。10代の若者が抱える問題が何であるかという結論にいたるために、どのようなことを調べていくのかを【今後の予定】の内容に付け加えるといいと思います。

(中畑)

問1 【中間報告書案】の下線部 10代のかかりの人がスマートフォンを手放せない生活をしていることが分かる

提として、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 10代の人たちがインターネットを利用するとき用いる機器の多くは、スマートフォンである。
- ② 10代の人たちがスマートフォンを手放せない生活をしているかどうかは、調べなければ分からない。
- ③ 10代の人たちがスマートフォンを利用することを禁止、または制限することに賛成である。
- ④ スマートフォンの利用は10代の人たちの友人関係を希薄にする原因となっている。
- ⑤ スマートフォンの利用は10代の人たちの学力低下の原因となっている。

問2 【中間報告書案】を研究の全体像を伝える中間報告書としてまとめる際に、内容や表現をよりよくするために上田さんが取り入れるべきアドバイ

スを述べているのは誰か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 立石さん
- ② 下山さん
- ③ 中畑さん
- ④ 奥川さん
- ⑤ 横峰さん

4

次の文章を読んで、問1～問6に答えよ。

日常生活世界を解説した社会学者A・シユッツによれば、私たちは普段「類型」に準拠して他者を理解し、「類型」は私たちがそれまで蓄積してきた「知識在庫」に依存しています。たとえば先の男子学生が卒業して社会に出ると「サラリーマン」となります。「サラリーマン」という「類型」は、アイロンが効いたしわのないワイシャツに興味のいいネクタイを締め、落ち着いた色のスーツを着て、にこやかにお客様に対応するといった実際の場面に即応した常識的知から構成され、そのほとんどが外見、見た目に関連したものと云えます。より外見に徹底した「類型」といえば、「就活する大学生」を思い出します。個々の学生がどのような人間性を持ち、どのような思想をもっているのかなど、「内実」に一切関わりなく、就活スーツに身を固め、清潔な髪形に整えた瞬間、彼らは「就活する大学生」に変身してしまいます。

人間は外見や見かけではなく、その中身が大事だ、という考えを否定する人はまずいないでしょう。そうでありながら同時に私たちは普段、いちいち目の前にいる他者の「なにかみや」を気にして、生きていくわけではありません。他者の内実ではなく他者の「外見」をもとにして、その場その時に応じて、目の前の相手が何者であり、どのように対応すれば適切であるかを瞬時のうちに判断し、実践しているのです。だからこそ、外見を考へることは、日常における他者との出会いや他者理解を考へるうえで、とても重要な営みだと言えるでしょう。「たかが外見、されど外見」なのです。

「されど外見」を考へるとき、私たちは普段、他者とのように向きあっているのかをじっくりと見つめる必要があります。そしてこれは、ゴフマンという一風変わった社会学者が生涯テーマとした「共在」他者とともに在ること」を考へ、そのありようを解説する営みと密接に関連しています。ゴフマンは、人間が他者と共にいる営みや複数の人間からできる集まりには、それ自体固有の秩序がつくられ維持されているという事実を明らかにしています。「相互行為秩序(the interaction order)」というものです。

たとえば、私たちは電車に乗っている時に、どのような秩序を維持しながら過ごしているのでしょうか。私がまず思いつくのは「他者はじっとみつめない」というルールです。どんなに目の前の座席に座っている人が魅力的であろうと私はその人をじっと見つめたりはしません。でもやはり気になる時は、その人だけを注視するのではなく、他の光景も眺めているふりをしながら、それとなく見るでしょう。ゴフマンの言葉を借りれば、それは「焦点をあわせない(unfocused)」見方であり、こうした秩序が維持されているのは「焦点をあわせない人々の集まり」であり、電車のような公共的な空間で典型的にみられる現象です。つまり私に限らず乗り合わせた多くの人は、電車の中では、特定の誰かに焦点をあわせないで、焦点をぼかしながら周囲の乗客の姿や様子を見るときもよく見ているのです。

さらに言えば私たちは、他の乗客との「距離」を絶妙に保ちながら、自分の場所を維持しつつスマホに熱中したり音楽を聴いたり本を読んだりしてい

ます。ゴフマンに言わせれば、新聞や週刊誌や本は、他者との「距離」をとり、「距離」を保っていること、言い換えれば自分は他者に対して関心はないし、他者という存在へ関与するつもりもないことを周囲の他者に表示するための「道具」なのです。もちろん今はスマホこそ最適な「道具」です。

ただそうした視線の取り方や「道具」が通常に機能して電車内の秩序が維持されるとしても、それが危うくなる状況はいくらでも起こり得ます。

満員電車に乗って、私はいつも気になり、どうしようか困ってしまふことがあります。それは隣に立っている人や座っている人が熱中するスマホの画面が「見えてしまう」ことです。見たくなければ目を閉じればいいのですが、満員で身動きもままならないとき、目を閉じ続けると不安定な状態になるし、さりとて他に視線を移そうとすれば、そこでも別のスマホの画面が見えてしまいます。見たくもないものが、まさに「見えてしまう」のです。

でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか。先に述べたようにスマホは使用している人にとって、満員電車という人間が充満した異様な空間で、自分の世界に閉じこもることができると有効な道具です。それは同時に他者に対して関心もないし関与もしないことを示す道具でもあります。イヤホンで音楽を聴き、スマホの画面に目を落としてゲームやLINEのやりとり集中している姿。それは周囲の世界や外界に対して耳も目も遮断し、自分だけの世界に集中している姿を周囲に表示していることとなります。「表示する」と書いたのは、もちろんスマホに熱中するとしても、その人は完全に他の乗客や外界の音や様子を遮断しているのではなく、聞こうと思えば聞けるし、見ようと思えば見えるからであり、そうした外界との繋がりを意味しています。

さきほど電車内で人々が適切に「距離」を保つことが電車の秩序にとって重要だと述べましたが、満員電車のように「距離」すら保つことが困難な場合、私たちはどのようにして自分を守り、自分と他者との繋がりを維持しようとするのでしょうか。ゴフマンの発想を借りて、私はこう考えます。

私たちは、自分を守る「膜」とでもいえるものを持っています。それは状況によって堅牢な「殻」となるかもしれませんが、薄く、破れやすく、誰の目にも見えない透明な「膜」です。そして満員電車のように人間が過剰に密集してしまうとき、当然「距離」の維持は難しく、さらに「膜」さえもお互いに触れ合い、擦りあわせることで、破れてしまう危険に私たちはさらされます。そのような状態のなか、私たちは、スマホなど使える「道具」を駆使して、互いの「膜」を破る危険を回避できるよう細心の注意を払っているのです。

私が困ってしまうのは、隣の他者の「膜」をなんとか破らないように注意を払い、その場でいろいろとふるまっても、「膜」の向こうにある他者の世界が「見えてしまう」からです。LINEのやりとりや個人で検索している情報やゲームの様子など、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている「自分だけの世界」を「侵犯」してしまう危うさを感じるからなのです。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないこと。これこそ、私たちが日常しっかりと守っている最大の儀礼と言えらるでしょう。そしてこの儀礼を行使することに外見が密接に関連しています。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないという儀礼は、さらに私たちがその場そのときに応じて適切に自分の「外見」を整えることで達成されます。

たとえば私は、電車で空いている席を見つけると、座る前に必ず「すみません」と両側に座っている人に声をかけるか片手を少し前に出して「これから私がそこに座りますよ」という意思表示をします。両側の人のコートや上着の裾を尻で踏まないように気をつけながら座り、リュックは両腕で覆うようにして抱え、膝の上でしつかりと安定させます。ここまですれば、自分の「膜」はしつかりと守れるし、両側の人の「膜」にも触れないし、私の世界にも「侵犯」する危険性はなく、ほぼ完璧な「乗客としての外見」を私はつくりあげることができます。そしてこうした外見をつくりあげた後で、今日の講義で使えそうな面白いネタはないかと、どこに焦点をあわせることもなく、乗客の様子を細かく観察しています。

状況に応じて必要だとされる外見を整えること。この営みは、ほとんど誰もが逃れえないものと言えるでしょう。でもなぜそのような営みを私たちはしてしまうのでしょうか。これもゴフマンから得た私の知識ですが、私たちは常に自分の姿をめぐるその場の時の状況に適合するように印象操作をしています。それはただ姿かたちという外形的なことだけではありません。自分自身がどのような存在であるかを相手にわからせようとする自分の身にまで関わっていく印象操作という営みです。

たとえば私は大学で常にジーンズとシャツやセーターといった姿で授業やゼミをし、会議に出ます。なぜそのような姿でいるのかを深く考えたことはありませんが、やはりこれまで出会ってきた社会学の先輩である多くの先生の姿が影響していると思います。大学とは学問研究の自由が確保される空間であり、世間的な慣習や秩序からも一定自由な空間です。大学の先生だから先生らしい格好をしなさいと指導教員から「指導」されたこともありま
せん。おそらくは自分の社会学を自分らしく「教え伝えるうえでもっとも気持ちがいい印象操作をしようとする結果、そのような姿となっているのでしよう。^D外見を考えるうえで、重要な手がかりは「自分らしさ」です。

いずれにしても、私たちは表現したい自分の姿があり、それをうまく伝えることができるよう、化粧やファッション、身体の加工などいろいろと工夫し、自らの外見を整えながら生きています。またすでにおわかりのように、私は「外見」という言葉を単に衣装や化粧などで自分の顔や身体を表層的に整える営みだけを含めていたわけではありません。そうした営みだけでなく、さまざまな状況で、その場を構成するメンバーとして「適切にふるまうための」^E「処方箋的な知」やふるまい方も含めています。なぜなら私たちの多くは、自分の人間性や内実などと関係なく、その場の秩序にあわせ、「適切にふるまう」ことができるからです。

(好井裕明『他者を感じる社会学 差別から考える』による。)

(注1) A・シュッツ——二〇世紀の社会学者、哲学者。オーストリアで生まれ、のちにアメリカに移住した。生涯の大半を実業人として生きながら、研究を続けた。

(注2) 先の男子学生——出典ではこの前の部分に就職試験の際に面接官から入社したら鬚ひげを剃そるよう念を押された大学生の話がある。

(注3) ゴフマン——二〇世紀の社会学者。カナダで生まれ、のちにアメリカに移住した。著書に『行為と演技』などがある。

(注4) ゼミ——ゼミナールの略。大学の教育法の一つ。教授などの指導のもとに、少人数の学生が特定のテーマについて研究し、報告・討論するもの。

問1 傍線部A「類型」とあるが、本文における「類型」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

11

- ① 経験で蓄積された常識的知によって各個人の性格をグループ分けしたものの。
- ② 日常生活世界の行動のパターンに応じて社会学者がグループ分けしたものの。
- ③ 主に身なりに関する社会一般の了解事項に基づいてグループ分けしたものの。
- ④ 各自の社会的立場に応じた役割を果たすために必要な能力に基づいてグループ分けしたものの。
- ⑤ 人間性や思想は外見的特徴にそのまま反映されるという通念で人々をグループ分けしたものの。

問2 傍線部B 相互行為秩序 とあるが、電車内において乗客が「相互行為秩序」を維持しようとしている例として適当でないものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 電車に乗り込んだとき、車内が比較的空いていたので、他の乗客とある程度の距離をとって座る。
- ② 電車内で隣に立っていた乗客と目が合ってしまったため、特に興味はないが車内広告に目を移す。
- ③ 高校生が電車通学の際に雑誌に目を落としたり、車窓の風景を見ながら考えごとをしたりする。
- ④ 満員電車ではあったが、音が漏れないように気を付けながらイヤホンで好きな音楽を聴く。
- ⑤ 電車内で騒いでいる小学生たちが、引率の先生に指導されることで席に座る。

問3 傍線部C それが危うくなる状況 とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 他者との距離をつくりだすはずの道具も、状況の変化によって個人的な領域に踏み込みきっかけとなってしまう、公共空間の秩序が保たれなくなる可能性があるということ。
- ② 他者との距離をつくりだすはずの道具も、使用者の意図次第で他者の私的世界を侵す道具となり、人々の努力で成立している秩序が成り立たなくなる可能性があるということ。
- ③ 他者との距離をつくりだすはずの道具も、SNSなどの発達によって他者との繋がりを生む側面もあるため、人々が適度な距離感のある関係を維持できなくなるということ。
- ④ 私的世界を守る膜を破らないようにするための道具も、使い手の個性が反映されるため他者の感情を強く刺激して、他者との摩擦を生む道具になりうるということ。
- ⑤ 私的世界を守る膜を破らないようにするための道具も、使用者を自分だけの世界に閉じこもらせてしまい、周囲の他者への配慮を不足させるものにもなりうるということ。

問4 傍線部D 外見を考えるうえで、重要な手がかりは、自分らしさです。とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 人間は自分自身の顔や身体を表層的に整えるのではなく、表現したい内面がそのままその人の外見となるから。
- ② 人間がその人に対して持つ印象はそれぞれであり、それらの印象を総合したものがその人の外見となるから。
- ③ 人間はそれぞれ相手に見せたい理想の外見というものがああり、そのための努力がその人の外見に反映するから。
- ④ 人間がそれぞれ固有の内面を表現するために、相手に与える印象を形成した結果がその人の外見となるから。
- ⑤ 人間は他者から悪印象を抱かれたとしても、自分らしい外見を整えていれればいずれ好印象に変わるから。

問5 傍線部E 「処方箋的な知」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 自分一人だけのものではなく、その共同体の多くの人々が代々伝え育んできた伝統的な知への理解のこと。
- ② 円滑なコミュニケーションを図るために、相手の心理の機微に通じたふるまいを可能とする教養のこと。
- ③ 何かが為されようとする場合、さまざまな状況において、その場を構成するメンバーに求められる能力のこと。
- ④ 自分一人の考えや感情などは抑制して、冷徹なものごとをやり遂げる強い意志に裏付けられた知性のこと。
- ⑤ それぞれの状況でどのようなふるまいが正しいかということに関する、社会的通念に基づく知識のこと。

問6 この文章の内容について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 筆者自身の実体験に即しながら心理学的な知見に照らし合わせて、人間の自意識が「外見」というものにどのような意味を持たせ、それが一人ひとりの意識する自分のあるべき姿とどのような相関関係にあるかを論じている。
- ② 筆者自身の実体験を含む具体例や社会学の見解を引用しつつ、社会という枠組みの中で「外見」というものがどのような意味を持ち、それが一人ひとりの意識する自分のイメージとどう関わっているかについて論じている。
- ③ 筆者自身の実体験には依存せず、常に一定のデータに基づきながら統計的に人間が「外見」というものをどう捉えているかを提示し、社会との関わりにおいて「外見」というものの持つ意味を明らかにしようとする論じている。
- ④ 筆者自身の実体験には限定せず、さまざまな人々の実例をあげ、読者が直接には経験しえない特殊な視点から「外見」というものを人間がどのように捉えてきたのかを実証的に検証し、社会と個人の意識との関わりを論じている。
- ⑤ 筆者自身の実体験を社会学の見解に基づいて考察し、その結果から社会という枠組みの中における個人の在り方について仮説を立て、その仮説を実証的に検証して「外見」というものが果たす社会的役割について論じている。

5

次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、問1～問5に答えよ。

Ⅰ

頼光朝臣の郎等季武(注1)が従者(注2)、究竟(注3)の者ありけり。季武は第一(注4)の手利きにて、さげ針(注5)をもはづさず射けるものなりけり。件(注6)の従者、季武にいひけるは、「さげ針をば射給ふとも、この男が三段ばかり退きて立ちたらんをば、え射給はじ。」といひけるを、季武、「やすからぬ事いふやつかな。」と思ひて、あらがひてけり。「もし射はづしぬるものならば、汝(注7)がほしく思はんものを所望(注8)にしたがひてあたふべし。」とさだめて、「おのれはいかに。」といへば、「これは命をまゐらするうへは。」といへば、「さいはれたり。」とて、「さらば。」とて、「たて。」といへば、この男、いひつるがごとく三段退きて立ちたり。季武、「はづすまじきものを。従者一人失ひてんずる事は損なれども、意趣(注9)なれば。」と思ひて、よく引きてはなちたりければ、左の脇のしも五寸ばかり退きてはづれにければ、季武負けて、約束のままに、やうやうの物どもとらす。いふにしたがひてとりつ。その後、「今一度射給ふべし。」といふ。やすからぬままにまたあらがふ。季武、「はじめこそ不思議にてはづしたれ、この度はさりとも。」と思ひて、しばし引きたもちて、ま中において放ちけるに、右の脇のしたをまた五寸ばかり退きてはづれぬ。その時この男、「さればこそ申し候へ、え射給ふまじきとは。手利きにてはおはすれども、心ばせのおくれ給ひたるなり。人の身ふときといふ定(注10)、一尺には過ぎぬなり。それをま中をさして射給へり。弦音(注11)聞きて、そとそばへをどるに、五寸は退くなり。しかればかく侍るなり。かやうのものをば、その用意をしてこそ射給はめ。」といひければ、季武、理に折れて、いふ事なかりけり。

(『古今著聞集』による。)

- (注1) 季武——ト部^{うらべ}季武。平安時代の武将。
- (注2) 究竟——武芸にすぐれた者。
- (注3) 第一の手利き——ここでは、弓の名手の意。
- (注4) さげ針——糸でつり下げた縫い針。
- (注5) この男——自分のこと。
- (注6) 三段——約三二メートル。
- (注7) 意趣なれば——武士の意地で、もはや後には引けないので。
- (注8) やうやうの物——さまざまの望みの品物。
- (注9) 五寸——約一五センチメートル。
- (注10) ふときといふ定——太いとはいっても。
- (注11) 一尺——約三〇センチメートル。
- (注12) 弦音——矢が弦を離れた音。

II

石崇(注13)為レ客作二豆粥一咄嗟(注14)便辦(注15)恒冬(注16)天得二韭薺一又牛ノ形状二氣力一不レ勝二王一
 愷牛一而與レ愷出遊シ極晚發(注17)争レ入二洛城一崇牛ハ數十步後迅(注18)若二飛禽一愷牛ノ絶ぜつ
 走そう不レ能レ及フ每ツ以二此一三事一為二搯腕一乃密シ貨崇(注19)帳下ト都督トク及レ御車ヲ人ニ問フ所以一
 都督イハク曰ハク「豆至ツテ難煮ガタシ唯予タダ作二熟末一客至レバ作二白粥一以テ投ズ之ニ韭薺ハ是コレ搗ツ韭根一
 雜まじ以二麥苗一爾のみ復問フ馭人ニ牛所ノ以テ駛ハスル馭人云「牛本ハ不レ遲カラ由二将車人一不レ及バ制スル之ヲ爾ナ急時ハ聽ユル偏轅ヘン則スナハ駛スト矣ト愷悉コト從ヒ之ニ遂争フ長ヲ
(注21) (注22) (注23) (注24)

〔世説新語〕による。

(注13) 石崇——西晋の富豪。西晋は中国の王朝名。

(注14) 辦——できあがり。

(注15) 韭薺——「にら」と「うきくさ」を使って作ったなます料理。冬には、うきくさが手に入りにくかった。

(注16) 王愷——中国、西晋の王室の外戚。

(注17) 洛城——中国、西晋の首都。

(注18) 飛禽——飛ぶ鳥。

(注19) 帳下都督——大將軍の属官の一つであるが、ここでは私設の執事のようなもの。

(注20) 熟末——煮てすりつぶしたもの。

(注21) 麥苗——麦の若芽。

(注22) 馭人——御者。牛車をあやつる人。

(注23) 駛——速く走る。

(注24) 聴偏轅——牛車の前に長く出した二本の棒の一方をはずす。

問1 傍線部A 「やすからぬ事いふやつかな。」とあるが、季武はなぜこう言ったのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 17。

- ① 従者が、季武が矢を外したら、自分の命とひきかえに望むものの要求をつり上げてきたことに対して、怒りを覚えたから。
- ② 従者が季武に向かって、自分の方が弓の技術に優れ、的を射当てる点では季武より上だと言ったことを、不快に思ったから。
- ③ 従者が季武に向かって、自分自身に射当てることができないうと言ったことについて発奮して、おもしろく感じたから。
- ④ 従者が季武に向かって、さげ針を射ることができないだろうと挑発したことに対して、不満を感じたから。
- ⑤ 従者が季武に向かって、離れて立っている自分に射当てることはできないだろうと言ったことを、快く思わなかったから。

問2 傍線部B 「さいはれたり。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 18。

- ① 従者が望むものを自分は差し出すのに、その見返りが無いことについておかしいと季武が不満を持ったということ。
- ② 自らの命を差し出すのだから、それ以上差し出すものはないという従者の言葉に、季武が納得したということ。
- ③ 自らの命を差し出すのだから、季武が矢を外したときに望むものをもらえることは当然だと従者が思ったということ。
- ④ 命を差し出す約束をしても、季武の射る矢は当たらずに、何の問題もないと従者が思ったということ。
- ⑤ 従者に命のやり取りをしようと提案されたことに対して、季武が迷ったすえに承諾することを決めたということ。

問3 傍線部C 咄嗟便辦 が可能になったのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 客が来ると聞いたときから、粥を煮はじめたときから、粥を煮はじめてそれと同時にすりつぶしておいた豆を入れて煮込んだから。
- ② 煮えにくい豆を細かくしてから煮ることによって火を通りやすくしておき、作り置きしていた粥に入れたから。
- ③ 煮えにくい豆を前もって煮て、すりつぶしたものを作っておき、客が来てから粥を煮て入れていたから。
- ④ 煮えにくい豆を前もって水につけておき、客の来る前に粥と同時に煮て、豆が煮え切る前に出したから。
- ⑤ 小さく火が通りやすい豆を選び準備しておき、客が来たときにすりつぶしていた粥と同時に煮込んだから。

問4 傍線部D 為搯腕 は「非常にくやしがる」という意味だが、なぜ王愷はくやしがつたのか。その要因の組合せとして最も適当なものを、次の

- ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ア 牛の体つきや気力でかなわない
- イ 韭薺を常に準備することができない
- ウ 牛の速度でかなわない
- エ 豆粥をすぐに作り上げることができない
- オ 豆粥をどのような時期にも作ることができない
- カ 韭薺をすばやく作ることができない

- ① アとイとウ
- ② エとオとカ
- ③ アとオとカ
- ④ イとウとエ
- ⑤ ウとオとカ

問5 国語の授業でⅠ・Ⅱの文章を読み終えた後に話し合いを行った。次の【話し合いの一部】を読んで、空欄 ・ に入るものとして最も適当なものを、後の各群の ①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ・ 。

【話し合いの一部】

山田さん 「Ⅰの文章では、前半のところでは挑発をしてきた従者と言いついては描かれているね。」
 清水さん 「Ⅱの文章でも、前半では王愷が石崇と競い合って、上ずかずに悔しがつていて姿が描かれているね。」
 山田さん 「後半では、Ⅰの文章・Ⅱの文章、どちらも が描かれているという点が共通しているね。」
 秋山さん 「たしかに、Ⅰの文章では、従者が矢の当たらないことについて話をしているし、Ⅱの文章では、都督と馭人が豆粥・韭薺・牛のこについてそれぞれ話をしているね。」
 清水さん 「しかし、話を聞いた後の、登場人物の様子Ⅰの文章とⅡの文章では、少し異なっているね。」
 山田さん 「そうだね、 になっているね。」

- X
- 21
- ① やっていたことの真相を説明する場面
 - ② やってしまったことを懺悔する場面
 - ③ 用意や心持の不十分さを指摘する場面
 - ④ やっていた内容を自慢する場面
 - ⑤ 少しの工夫の大切さを説いている場面

- ① 文章Ⅰは従者の言うことを不快に感じて、従者が何も言えないようにしている状態、文章Ⅱは聞いた内容を採用している状態
- ② 文章Ⅰは従者の言うことに反発して、我を通そうとえらそうにしている状態、文章Ⅱは聞いた内容を世の中に広めている状態
- ③ 文章Ⅰは従者の言うことを信じて、より一層矢の腕を磨こうとしている状態、文章Ⅱは争った人物と関係を修復している状態
- ④ 文章Ⅰは従者の言うことに道理があると了解して、何も言えない状態、文章Ⅱは聞いた内容を行い優劣を競い合っている状態
- ⑤ 文章Ⅰは従者の言うことに賛同して、その教えを広げていこうとしている状態、文章Ⅱは聞いたことを全て拒絶している状態

